

# ジンメル の 「生」 の 哲学 と

## レンブラント

— 宗教と芸術の問題を中心に —

中 沢 早 苗

ただ机上で、化石のようになってしまった思想を学ぶのではなく、今生きていることに深く係わってくるような思想について少し考えてみたい、そんな気持ちでジンメルをとりあげた。もちろん、これから論ずることは、ジンメルの深い思索の世界のほんの一片にすぎない。

## 第一部

a

デカルト以降、西洋の哲学は純粋理性の概念を追求してきた。しかし、いつの時代の人も自らの内に理性とはちがう力を感じていた。最高の理想を求めながらも、人々の生き様はそれに完全に従うことができなかった。新約聖書『ローマ人への手紙』の中でパウロは言っている。「わたしは自分のしていることが、わからない。なぜなら、わたしは自分の欲する事は行わず、かえって自分の憎む事をしているからである。」<sup>1)</sup>これは、ここに引用するには少々極端な例かもしれない。しかし、我々人間の本来の姿を端的に表わしてい

ると思う。

パウロは、イエス・キリストをひたすら信仰することによって、この悲惨な状態から救われていることを確信していた。即ち、神は、創造した人間を滅びに至る罪から救うために、神のひとり子イエス・キリストをこの世に遣わし、彼を十字架につけて、ただ滅びるばかりの人間を罪からあがなった——ということを信じるのが、キリスト教の信者である。キリスト教は古代ギリシアの思想とならんで、西洋思想史の根底となっているものである。

ユークリッドやヒポクラテスたちに代表される古代ギリシアの科学的、実証的精神の現われは、近代ヨーロッパの自然科学的思想形態に結びつくであろうし、また古代ギリシアの芸術における理念の表現ということについては、近代にあつては同様のこと、つまり芸術は理念を表現するものということが言われていた。こうしたこととともに、キリスト教の神も、生きているにせよ死んでしまつたにせよ、あるいは概念化してしまつたにせよ、西洋の文化の中に深く浸透している。古代ギリシア、ローマの時代を過ぎ、中世のキリスト教時代、そしてルネサンスにおける古代ギリシア、ローマの再生、さらにロマン主義の時代には、人の思いは再び中世の高みを目指した。また、科学とキリスト教が対立し、ついにはニヒリズムの思想も生まれた。こうした流れの中にあつて人はとにかく、自己という主観的存在に戻ってきたようである。「生」の哲学は、そのような歩みの一つである。

近代の部分だけをもう一度とりだしてみると、それまでの哲学では、文化や歴史の根底に理念を置いていた。しかし、こうして刻々と変化していく世界の中で、自らも生きて動いている我々が正直に

この世界を見つめるなら、そうした合理的、理性的な価値は素晴らしいものではあるが、額縁にはまった絵のようにしか思えないこともない。「それは直接の生きた文化と歴史ではなく、既に加工された、従って間接化され、血の気の失せた文化と歴史に過ぎない。」<sup>(2)</sup>のである。我々は生きている、そしてもちろん、理性も持ち合わせている。しかし、我々をつき動かしているものが何であるかを考えた時、迷わずそれは理性だ、と答える気にはならない。「生」の哲学はここでひとつの、我々の心を捕え得る答えを与えてくれるであらう。

これから論じようとしていることは、「生」というものの宗教的な面であるので、必然的にキリスト教のことに傾いてしまうと思ふ。しかし、「生」は古代ギリシアの時代はもちろん、先史時代、否、時間の始まるころから流れつづけていたのである。今では実存主義哲学の影にそのなりをひそめてしまったような「生」の哲学であるが、「生」は変わることなく流れつづけている。

## b

G・ジンメルの著書『レンブラント』には、「芸術哲学的試論」という副題がついている。この著書は他のレンブラント論とは異なり、レンブラントの芸術を論ずるを通して、ジンメルの「生」の哲学が語られている、と言つてもさしつかえないであろう。

美術史においてレンブラントはバロック時代の中で扱われているが、ジンメルはレンブラントをそのような歴史的な流れの中に位置づけてはいない。つまり芸術作品の研究方法には、そのような「歴史的諸条件の探求」<sup>(3)</sup>をする場合と、「芸術作品から個々の効果要因

をとりだす<sup>(4)</sup>」場合とがあるが、ジンメルはこれらの方法においては、芸術作品の精神的意義は理解されないとしている。このような方法の背後に開けてくるのが、副題にあるような「芸術の哲学的考察」である。即ち、「芸術の総体を、現存するもの、体験としてすでに前提としており、これを精神の広大な活動領域の中に、高次の抽象的思考の世界内に、世界的諸対立の深みの中に位置づけようとする」<sup>(5)</sup>方法である。レンブラントの芸術はこの考察方法にうってつけであると、ジンメルは言う。なぜなら、レンブラントの芸術においては、「非合理的体験が、この上もなく純粹に、音楽に次ぐ純粹さのうちに実現される」<sup>(6)</sup>からである。先にあげた二つの方法は、レンブラントの芸術の前では全く歯が立たないものなのである。

さて、非合理的な芸術体験とは如何なるものであるか。それはまず、客観的に記述できないものであり、また、事実の形式をとり、理論はこれに近づけないところのものであり、さらに、個人的な色調を帯びているものである。<sup>(7)</sup>芸術体験を自然科学的、機械論的に分析することは、ジンメルの方法ではない。彼は芸術体験があるがままに是認する。この方法は、同じく「生」の哲学者ディルタイが「了解」(Verstehen)と呼んだ方法にも通じるであろう。

「生」とはいったい如何なるものなのか。このことについては後の項で詳しく述べてみるつもりであるが、今ここで一言付しておきたいことは、理性を追い求める哲学が何か冷たく堅い印象を与えるのに対し、「生」の哲学には暖かさがあるということである。つまり、それは人間的な暖かさなのである。

「生」というものが概念として言葉で表現される場合には、ひどく抽象的でわかりにくいということはいえる。しかし我々は實際、この「生」というものに深く係わっているのである。ジンメルの「愛」についての断章の中に、「生」が如何なるものかを感じとらせるものがある。即ち、例えば人間の性的な動きの目的や手段の概念が、どれほど衝動的でせせこましいものであるうとも、「生」はそれらをただ種属保持という目的のために使う、というのである。生命の歴史は数十億年、その最初の正確な事実など確かめる術もないが、生命はとにかく今現在まで続いてきた。これは「生」というものの力、姿の一面をよく表わしている。

この「生」は、また実に豊かで大きなものでもある。第二部で示す「宗教的」ということは、その一面でしかない。しかしジンメルによれば、そうした一面、一つの瞬間においても、「生」は全体としてあるのである。「いかなる人間にとつても、生はその個々の瞬間の総和のうちにもその全体性を有しているのではなく、一つひとつの瞬間が生<sup>9</sup>の全体なのであつて……(Das Leben eines jeden seiner Träger hat seine Ganzheit nicht in der Summe seiner einzelnen Momente; sondern jeder Augenblick ist das ganze Leben.)」

ジンメルの愛弟子ゲルトルート・カントーロヴィチ (Gerrud Kantorowicz) は、ジンメルの日記の遺稿などからなる『断想』(Fragmente und Aufsätze. Aus dem Nachlaß und Veröffentlichungen der letzten Jahre. Hg. mit dem Vorwort von Gerrud Kantorowicz, 1923) に述べられた序文を著つづるが、その中で

ジンメルの「生」の哲学が端的にまとめられている。例えば、「生」の姿には二つあり、一つは「流動する生」もう一つは「それ自体で完結した結晶体の生」であるということ。これをジンメルの言葉で表わすと、「より多くの生 (Mehr Leben)」と「生より以上のもの (Mehr-als-Leben)」となる。そして前者は無限に続く生、後者は絶えず自己の限界をのりこえていく生をあらわす。

こうした「生」は、どのような実りをもたらすかといえは、生成という純粋動力学的な性格をもつ極と、恒常不変の性格をもつ超時間的な存在の極がこの「生」において出会うということである。カントーロヴィチの言葉を引用すると、「……生の基本的な流れがたえず張り合い、互いに戦い合いながら対立するなかで、狭い意味での移り変わる生とそれに対する不変的諸形式の逆作用とから、存在と生成を包み込む大いなる生の全体が成立するのです」ということである。

このようなことから考えると、「生」というものは先にも述べたように豊かで大きなものであり、あらゆる知識・思想・歴史を包みこんでいる存在といえるであろう。「生」において、存在と生成という対立する二極が出会い、調和することは、我々人間の中で、理念的なものに魅かれていく思いと、感覚的な、およそ宗教的な見地からすれば罪とされるようなものに魅かれていく思いとの対立、葛藤も、この「生」においては必ずや調和されるのではないかと思うのである。

合理主義哲学とは逆に、人間の本質を非合理的な「生」としてとらえた「生」の哲学者には、ジンメルのほかに、ティルタイ W. Dilthey (1833—1911)、シンプランガー E. Spranger (1892—1963)、

ギョイヨー J. Guyau (1854—1888)、「ベルクソン H. Bergson (1859—1941) などがある。

ベルクソンは、「純粹持続」という言葉で我々の自我の在り方を述べている。この「純粹持続」という自我の在り方は如何なるものであるか。普通我々が自我と呼んでいるものは、実は表面的な自我 (le moi superficiel) であり、その底に本当に生きて動いている根底的自我 (le moi profond) がある。「純粹持続」は、後者のような根底的自我の在り方である。「…純粹持続とは、質的なる変化の連続のみあり得よう。その変化は互いに浸透し、互いに貫入し、明確な輪郭はもたず、相互に外的な関係に立とうとする傾向はなく、数とは僅かの類似をも示さない。それは純粹異質性であるといつてもよいであろう。」ベルクソンはこのように述べている。ベルクソンにおいては、この「純粹持続」が即ち形而上的な「生」なのである。

またベルクソンの「直観」は、「旋風のような運動であり、『生』との接触であり、特殊な時代的制約をもつにせよ、その根底においては時代を越え、何か永遠なものに連なる生の律動であり…」<sup>(1)</sup>これが彼の所謂「生の躍進 (élan vital)」の現われである。

デルタイにとって「生」は、自然科学的な方法によって簡単にとらえ得るものではなく、本能や意志や感情を統合した全体的かつ内面的なものである。そしてこの内的な「生」の表わされているものが、我々の様々な文化形態である。例えば、芸術作品に表現されている内的「生」を把握しようとするなら、自然科学的もしくは機械論的にそれを探究したところで、決してそれを理解することはできない。それを本当に理解するためには芸術作品を分解して考える

のではなく、全体的な関連の中でとらえ、追体験するのでなければならぬ。彼はこれを「了解 (Verstehen)」と呼んでいる。

「生」の哲学を思想史の中で定義づけるのがむずかしいのは、それぞれの哲学者がそれぞれ少しずつ「生」について異なった考えをもっているからかもしれない。先にあげた哲学者の他に、ショーペンハウアーは「生を否定する生の哲学者」であったし、ニーチェも「ショペンハウアーに深く心を惹かれながら、彼における生の否定をさらに否定し、生に対して大なる肯定を叫んだ」<sup>(12)</sup>のであった。しかし、先にあげた専ら「生」の哲学者と呼ばれている人たちにとって共通の信念であったことは、「生の深みは知性的な思考では探れない」<sup>(13)</sup>ということであろう。

「生」は本当に豊かなもの、私がそれについてこうして言葉に表わしている間にも、とどまることなく流れていくものである。そんなことを思いながらレンブラントの描いた人物画をみると、例えば、集団肖像画に描かれた人物のうちで最も奥の方に小さく描かれたようなものでさえも、確かに「生」に担われていることを覚えるのである。ジンメルは、ギリシア以来の古典芸術とレンブラントとを比較している。前者は、「ある特定の瞬間における事物の状態が、その瞬間まで流れてきて、その瞬間からさらに未来へ向って流れ去るところの生から引き離されて、一つの自足的な形式に結晶させられて (daß der Anblick eines bestimmten Momentes den bis zu ihm hin und unter ihm forstürmenden Leben entrisen wird und zu einer selbstgenügsamen Form kristallisiert…)」<sup>(14)</sup>おり、後者は、「描写表現された一瞬間は、過去から連続的にその瞬間に至るまで流れてきた生の動きのすべてを含んでいるように見える。つまりそ

の瞬間は、この生の歴史全体を語り告げている（…scheint bei Reimbrandt der dargestellte Moment den ganzen, bis zu ihm sich hinlependen Impuls zu enthalten, er erzählt die Geschichte dieser Lebensströmung）」のやま。

それにしても、「生」というものについて考えるとき、もちろんそれを機械的な運動法則などとくらべれば、確かに生きた人間に係わりがあり暖かみの感じられるものなのかもしれないが、「流動する統一体としての生」などといっても、我々の所謂「心」には、それがどれほどの意味をもつてあろうか。ベルクソンの「純粹持続」の自我の在り方にしても、誰もがそれに気付くことはないであろうし、気付いたところで我々の心は何か変わるだろうか。そうするとやはり、哲学や芸術よりもまだ後に述べる客観的宗教の方が、人々の心に慰めや救いをもたらすのかもれない。しかし、ジンメルはベルクソンについての小論の中で、次のように述べている。「そこでこの哲学の根底には、次のような慰めがひそんでいる。われわれが実際に内面から理解できるものは、ただ生きているものだけである。なぜなら、われわれ自身が生きているのだから。その他のものはすべて、算出し、結合し、利用することができる。しかし最終的にはこれらのものも生きているものである。非有機的なものは、客観的には、生の躍動の疲れ果てた状態にすぎず、すべての機械的なものは、主観的には、外面的な状態の象徴であり、手段であるにすぎない。その下に、またその中に、生きたものの中にあるような、本当の意味で絶対的な実在としての生が存在する。そして生の対立物である機械も生から生まれたものであるために、精神がすべての存在と結合され、そしてすべての存在を運ぶ流れ、というよりむしろ

ろすべての存在それ自身である中心の流れと結合される——このような結合が、形而上的な形象の中では、原理的に成就されているのである。」<sup>(16)</sup>ここにでてくる「慰め」は、生きることに思索することとを幾重にもした上に生まれた深い慰めであると思う。私はジンメルのこの「慰め」という言葉の裏に、宗教や、場合によっては芸術によってさえも慰められず、救われない現代人の悲しさを感じてしまふのである。「生」の与える深い慰めは、同じく「生」の与える深い悲しみと背中合わせなのだと思う。

## 第二部

第一部では、我々がふだんその存在に気付くこともないような「生」というものについて、それが実は我々に非常に関係の深いものであることを述べたつもりである。「生」の全てについて述べるには、どんなにページがあっても足りないであろうし、恐らくどんなに時間があっても足りないであろう。ただ我々は実際、生きることによって「生」について最もよく知り得ることができるとは思うが、もちろん全てを知りつくすことは不可能である。そのようなわけで、第二部では特に、「生」と宗教、魂のことについて、ジンメルの思索の跡を辿ってみようと思う。

a

宗教的なものを描いた作品と何かを宗教的に描いた作品では、どちらがより宗教的であるが、ということを考えてみるならば、やはり後者に軍配が上がるのではないだろうか。ジンメルは、レンブラ

ントが宗教的でない素材を対象として描いた作品を宗教的である、としてゐる。

教会やそこで行われるあらゆる儀式、そうしたものは誰の目から見て宗教的と映るであろう。しかし宗教的でない素材を対象として描いた作品を何故に宗教的と言えるのか、そこに「生」というものの性質をみることができる。レンブラントの作品では、専ら主観的な宗教が問題になつてゐる。どちらがより宗教的か、という時の宗教的は、主観的、宗教的、という意味をもつてゐるのである。即ち、主観的宗教は「もっぱら主体の内面的な生の中に移し置かれた宗教 (die Religion ausschließlich in das innere Leben des Subjekts verlegt)」であり「主体の内面的な生として存在してゐる宗教 (als inneres Leben des Subjekts bestehend)」なのである。

このような主観的宗教性に属する人間にとつて、教会やそこで行われる儀式は二義的なものになる。それらに対し彼は単に受動的であるか、あるいはかなり積極的なむしろ創造的な意味を見出すのかもしれない。しかし中心的には、彼は「ただ自己一身の幸福を求めたり、あるいは没我的に神に帰依したりする」<sup>(19)</sup>のである。彼は宗教を「生」一般の体験に求める。

この主観的宗教に対応するのが客観的宗教である。即ち客観的宗教においては、教会や儀式などの事実が客観的に人間の前に立っている。そしてこの場合、神と人間の魂は初めは対立しており、後になつて互いに受け入れ合うことになる。

信仰をもつ人間をこの二つの宗教の性質に分けてしまふことは不可能であろう。この二つの性質は、神への信仰をもつ人間の中に混在してゐるのではないかと思う。レンブラントが彼の母親を描いた

作品がある。レンブラントは幼い頃から、信心深い母親の膝の上で彼女の口から聖書の言葉を聞いて育つてきた。彼女はきつと、教会的な信者であつたのだらう。けれども、彼女の肖像画から圧倒的に醸しだされてくるのは、彼女の「生」の主観的宗教性ではないであらうか。

ジンメルは述べてゐる。「彼のすべての油彩画、銅版画、素描は宗教的人間というたつた一つの主題しかもつてゐない (All seine religiösen Bilder, Radierungen, Zeichnungen haben nur ein einziges Thema: den religiösen Menschen.)」

オスカー・ココシュカは「レンブラントの最後の自画像を見たときのことを次のように書いてゐる。「鏡の中に衰え行く自分を見つめ、<sup>(21)</sup>『無』を見、そして自分を『無』として描く——すなわち、人間の虚無を描いてゐる。虚無——あるいはそんなふうにも見えるのかもしれない。ココシュカがこれを書いたのは第一次大戦中、金銭的にも惨めなときであつた。しかし、晩年のレンブラントも貧しい生活や愛する者の死に遭遇し、精神的にもかなり絶望的な状態に追いこまれていた。それでも私自身としては、彼の最後の自画像から虚無ではなく、血のかよつた人間の苦悩が、流動する「生」が全体としてそこにあらわれていることを感じとりたく思う。そしてジンメルの言うように、彼もまた主観的宗教的人間といえるのではないかと思う。」

## b

さて、この主観的宗教的人間についてももう少し追求するために、次に、信心深さの問題をとりあげてみよう。

ここで扱う信心深さは、目で見れば簡単にそれとわかるというものではない。熱心に教会へ行き、祈り、献げることも信心深さを表わしているであらう。この場合の信心深さは、主観的宗教ではなく客観的宗教に属するものである。しかし、レンブラントの描く宗教的人物については、シンメルは次のように述べている。「レンブラントの宗教的人物では、信心深さは、一人ひとりの魂の最深处からいつでも新たに生み出されるのであって、人間はもはや客観的に敬虔な世界の中にあるのではなく、客観的に無関心の世界の中にある主体として敬虔なのである (Bei den religiösen Gestalten Rembrandts wird die Frömmigkeit jedesmal von neuem aus dem letzten Grund jeder Seele heraus erzeugt, die Mensch sind nicht mehr in einer objektiv frommen Welt, sondern in einer objektiv indifferenten Welt sind sie als Subjekte fromm.)」描かれている人物は宗教的人間であり、主体として敬虔である、というわけなのである。レンブラントにおいて、「描写されているその一瞬間は、それまで流れてきた生の動きをすべて含んでいるように見える」と、シンメルは言う。そうすると、宗教的であり、主体として敬虔であるということは、その流動する「生」の性質の一面とみてもよいであろう。この性質は決して「生」の極立った特徴ではなく、人間の様々な性質、つまり愚かであるとか賢いとか、あるいは活発であるとか怠惰であるとかと並び得るものであり、その人間に付着しているものなのである。描かれている彼らが全く教会へ行くこともなく、それよりもむしろ悪いことばかりしているような場合でも、彼は内的な信心深さをもっているのである。彼は天国や地獄も、中心の問題とはしない。シンメルは言う、「……これらの静か

な親しみ深い絵画に描かれた諸人物は、一つの客観的な生の内容としての宗教を持つてはおらず、彼らがすなわち宗教なのである (…insoweit haben die Menschen dieser stillen, familiären Bilder nicht Religion, als einen objektiven Lebensinhalt, sondern sind religiös.)」

このようなレンブラントの描く人物のもつ宗教性を、「個性的宗教性」ともシンメルは呼んでいる。この宗教性には多分にして、ルターの影響がある。『レンブラント』の中には、一度もルターの名は出てこないけれども、つまりルターによる福音主義は、中世の権威ある教会主義に反対し、個人一人ひとりが神との距離を近づけることができた。即ち、一人ひとりが神と親しくなったのである。時代の流れとともに、福音主義の教会や教義に従う人々はもろろいだし、逆にそれらは二義的な意味をもち、ただ神の存在を信じ親しんでいた人々、また、教会や教義もすっかり忘れてしまつて、神に祈ることも特別にしなくなつたが、信心深さという魂の性質だけは失い得なかつた人々……など様々であつたにちがいない。レンブラントの描く人物の多くは、教会や教義から離れ、形式的に祈ることなどなく、ただ信心深い魂の性質をもちつづけているのではないだろうか。したがつてレンブラントの芸術表現は、最も客観的な彫塑的表現方法とは異なつてくる。レンブラントの芸術における宗教性は、主観的、個性的、即ち内的なものであり、客観的な宗教価値は全く欠如しているのである。

ところで、我々がこの個性的宗教性を理性的に理解することは難

しいかもしれない。レンブラントの芸術は、理性的なものを表現することを目的としてはいない。そこに表現されているのは、理性的なものをも含んでいる何か全体的な、あるがままの人間なのである。だから、我々も同じ人間としての魂の、直観のようなものをもって、レンブラントの芸術を理解する。(ここで「理解」という言葉が適当かどうか知らない。というのは、宗教において、「理解すること」と「信じること」が違いうように、レンブラントの作品を見るとき、何故かそれと同じようなことを思うからである。) シンメルは言う、「彼の最も深刻な宗教画においてさえキリストの姿は、われわれの魂がこれを完全に理解し、その生涯と運命とを全くこの魂というものの側から規定させるような尺度において表現されている。(In seinen tiefsten religiösen Bildern ist die Erscheinung Jesu auf ein Maß gebracht, das sie völlig für die Seele durchdringbar, ihr Leben und ihr Schicksal durchaus von dieser her bestimmbar macht)。」このように「キリスト」という最も宗教的なものを描いた作品においてさえ、レンブラントの場合はその普遍的な宗教的価値を目的としたのではなく、ただひたすら「彼は自分の問題を人間の魂の存在に限定する(her begrenzt sein Problem an dem seelischen Sein des Menschen)」のである。だから、理性的に、客観的で普遍的なものを求めてレンブラントの作品に向かい合って、何ら得るところがなくても、魂によって彼の作品を見るなら、愛することや信じることと同じような理屈抜きのある深い満足感のようなものを感じることができないのではないだろうか。

さて、この個性的宗教性には確かに客観的で普遍的な宗教的価値というものはないのかもしれないが、しかしこれが客観的宗教に、

より強く属している人間の宗教性とくらべ劣っているなどということとは断じてできない。むしろそれらを比較し、上下価値を決めることの方が問題である。それらは上下というより、東と西のように遠く離れている価値、といった感じである。シンメルはこの個性的宗教性の価値について、次のように述べている。「……この場合、ただ全く個人の内部から一步も外へ出ようとはしない宗教的態度が一つの永遠価値として感じ取られるようになっていくという点こそ、この宗教性のきわめて偉大な比類なき特性があるように思われよう。(Das ganz Große und Einzige vielmehr scheint mir zu sein: daß hier das rein im Individuum verhaltende religiöse Verhalten als ein Ewigkeitswert fühlbar gemacht ist.)」<sup>(25)</sup> ところで彼は「この宗教性を客観的なもの」とまで言っている。即ち、「……宗教的事実が主体の存在の中に、もしくは主体の存在として根を下ろしている場合、その時こそ主体の宗教性は、それ自体何か客観的なものであり、ひとたびそれが定立されたとなると、現世における存在すべてをまた超時間的にそれだけ一層価値多いものとするところの一つの価値なのである(Wo aber die religiöse Tatsache in dem Sein des Subjekts verankert ist, da ist seine Religiosität eben selbst etwas Objektives, ein Wert, der, einmal gesetzt, das Dasein der Welt überhaupt und zeitlos um soviel wertvoller macht)。」<sup>(26)</sup> これはどういうことであろうか。このことを理解するために、我々は我々の感覚的、及び相対的に物事を考える習慣をどこかへやってしまわなければならない。つまり、「宗教に関するこのような考え方を理解するための絶対的条件は、宗教的諸価値の客観性がどこか人間以外のところに『根拠づけられている』というふう



に考えないことである。なぜなら人間主体の宗教的實質は、すでに何か客観的なものであり、それ自体において形而上学的な意味を持った一つの存在だからである（Um diese Auffassung der Religion zu begreifen, darf die Objektivität ihrer Werte absolut nicht mehr von einer "Lokalisierung" außerhalb des Menschen bedingt sein. Die religiöse Beschaffenheit des Subjekts ist ja selbst etwas Objektives, ist ein Sein, das an und für sich metaphysische Bedeutung hat.）と、ジンメルは述べている。確かに、この大宇宙をどこまで行ってみたところで、神に出会えるとは思えない。初めに述べた客観的宗教性に属する人には、あたかも神を相対的な存在として信じている場合もかなりあるのではないだろうか。それでは神は何処にいるのだろうか。このことについては、

「魂」の問題も深く係わってくるので、後の項にゆずることにする。ジンメルは、神の居場所などは一切問題にはしていない。レンブランドの描いた人物は、「たとえ神が存在せず、信じられなくても、この敬神のうちに生きて行く……」<sup>(30)</sup>、そういう信心深さ、宗教性をもっているのである。そしてこの宗教性は、神を中心としたものではなく、主体を中心とし、しかも客観的価値になり得るところのものなのである。

芸術作品が理念や精神あるいは魂を表現するとはよく言われることである。「生」の哲学の立場から言えば、それは「生 (Leben)」の表現となるであろう。ジンメルの論ずるところのレンブランド芸術においても、そのことはあてはまる。このように言ってしまうば、全てが簡単に片付いてしまったかのようにみえるが、ここで「魂」について考えてみるなら、「生」が我々にさらに深いものを

示してくれることであろう。

「人が死ぬと魂が天国にのぼっていく」——という我々の中に浸透している素朴で単純な考え方からもわかるように、我々の多くは、世界や宇宙そして天国といった客観的なものと自分の魂とを関係づけるようである。我々の魂はそうした客観的な対象に包まれ、護られ、安心しているのだ。そして魂と神は、各々全く別の相対する存在として関連しあっている。しかし実際そうなのだろうか。これらのことは、ただ我々多くに共通の願いであるにすぎないのではないだろうか。もちろん、魂などという形而上学の問題に対して「事實はこうである」と断定する権利をもつ者など何処にも存在しないのであるが。

ジンメルは魂をそれ以外のものと関係づけたりはしない。彼は、「魂と世界の間には相互排他的関係があり、それは克服されなければならぬ困難である」と<sup>(31)</sup>としている。それでは世界と相互排他的関係にある魂とはどんな魂をいうのか。「それはこの世のものでもなく、さりとてまたあの世のものでもなく、その他一切の存在可能性を包括し、天と地を併せ呑むかの巨大な対立の彼岸に立つ魂なのである（……die als Seele nicht von dieser Welt ist——aber auch nicht von jener; jenseits des ungeheuren, alle sonstigen Daseinsmöglichkeiten umschließenden Gegensatzes, in den hier Erde und Himmel gestellt sind.）」<sup>(32)</sup>「魂とらうものは、何か絶対に他に較べることのできないものであり、すべて他の存在者や価値に対して超然としていて、ある意味では不可侵の一個の存在であり価値であって、それ自体においてすでに価値を持った主体の一王国であり、この王国は現世的宇宙に対してはいうまでもなく、恐らくは

また超現世的宇宙に對しても没交渉なのだ（……der Seele ein schlechthin Unvergleichliches gegeben ist, ein Wert, jedem andern Dasein und Wert gegenüber souverän und gewissensmaßen unberührbar, ein in sich wertvolles Reich des Subjektiven, dem freilich dem irdischen und vielleicht auch dem überirdischen Kosmos gegenüber das Einbeziehen und Einbezogenwerden abgeht.）<sup>(33)</sup>

ジンメルによれば、レンブラントの描く人物はこのような魂の持ち主なのである。恐らくこの魂の性質は、作者レンブラントの魂と、そして作者の手から離れ去り、完成し、それ自体で充足している芸術作品の魂にも共通のものであると思われる。そしてあの「生」の主體的宗教的という性質は、まさにこの魂の場合にもあてはまる。このような独立した一王国である魂の持つ宗教性にとつて、客観的な神も教会も教義も決定的なものではない。この王国を満たしているのは、あの「生」の豊かさである。決定的なものはひたすら、魂自身の持つ主體的宗教性であり、信心深さである。そして主體的な宗教それ自体の中心は、客観的な存在や救済の事実ではなく、そうした魂側の宗教性である。

こうしたことから、一王国である魂には、客観的な彼岸からもたらされる「希望」とか、あるいはその逆の「危険」という契機もない。この「希望」は所謂キリスト教的なものを指している。それは救済から永遠の命、天国、復活への希望である。「危険」は、彼岸からの要求にそぐえないことからくる恐怖である。レンブラントの人物は、これらの契機から全くかけ離れてしまっているのである。即ち、「それらの人物は希望とか絶望とかいうような範疇の彼岸に

立っていて、魂は天国と地獄への熱狂から引き退いて、天国や地獄よりもっと直接的な意味での魂自身の所有となつていて、このものの中に *einiges*（…… seine Gestalten stehen jenseit dieser Kategorie, die Seele hat sich aus den Überschwenglichkeiten von Himmel und Hölle auf das zurückgezogen, was im unmittelbaren Sinne als diese ihr Besitz ist.）<sup>(34)</sup>

魂についてのこのジンメルの言葉から、あの「生」における統一ということに思いを馳せることができようかと思う。これまで、主観的宗教性と客観的宗教性とを極端に對立させて考えてきつてしまつたといえるかもしれないのであるが、思うに聖書の言葉が信徒に求めている魂のあり方（もしそう言つてもよいのならば）は、決して理性的、道徳的であるとばかりはいえない。「人が義とされるのは行ないによるのではなく、信仰によるのである」<sup>(35)</sup>とあるように、まづは信じていることが肝心なのである。信じている——それ自体は、外側に現われる形がどれほど異なつていても、客観的宗教であれ主観的宗教であれ（これは、もちろん後からつけられた便宜的な名称なのだ）、それほどの相違はないのではないだろうか。もちろん前者における魂は客観的なものを求め、後者における魂は独立した立場にあることになるが、私自身としては、あの豊かな「生」の流れの中で両者が統一され得るのではないかと思う。ジンメルは、このことに関して次のようにしか述べていない。「……われわれは時によると、論理的には相背馳する二つの途を、それでもなおかつ同時に歩もうとし、あるいはまた両者の折衷、妥協の線を出そうとし、あるいはまたある一つの決断を實現しながらも、もう一方の

途を少くとも等しく可能な、等しく正当なものとして認めようとする)が、(manchmal aber versuchen wir, zwei logisch einander widersprechende Wege dennoch gleichzeitig zu begehen, oder Mischung und Kompromiß zwischen ihnen zu erreichen, oder, den einen Entschluß verwirklichend, erkennen wir wenigstens den andern als gleichmöglich und gleich berechtigt an.)」

「対立的な立場の各々が、たとえ概念的、数量的意味における同一の生ではないにせよ、とにかく生全体を包摂するという、論理的には明らかに曖昧な事がある場合には、なるほどそれぞれの立場の相違を明らかにするのは必要なことであろうが、しかしそのどれか一つの立場のみ承認するに必要はないのである (Wo das, wie ich zugebe, logisch dunkle Verhältnis besteht, daß jede der Parteien das ganze Leben, wenn auch nicht in begrifflich-numerischen Sinne dasselbe Leben enthält, da ist es zwar geboten, sie zu scheiden, aber nicht, zwischen ihnen zu entscheiden.)」

この後の言葉は、ジンメル著『レンブラント』の結びの最後の言葉である。今まで延々と述べてきたこともまた、絶対的なものではない。ただある立場を明らかにしようとしてきただけなのである。

ジンメルの言う魂が天国と地獄を超越した彼岸に立っているように、芸術は様々な対立を最も超越した存在である。一般的に、芸術作品とそこに表現されている理念との間に多少なりとも距離のようなものを認めるなら、レンブラントの場合は、作品と魂の距離など全くない。目に見える形や色と、形として見えない魂は、少しも離れてなどいないのである。それらすべてが一つに統合されて完結した芸術作品となっている。このように「偉大な芸術」というものは、

たとえそれがどれほど急進的に一つの志向、一つの様式を代表しているとしても——自己の反対物を拒否することによって却ってそれを予想せざるという意味での排他的なものではなく、偉大な芸術の中には、一切の対立関係を超越する生の全体性が、何らかの形で含まれている) (Eine große Kunst mag so radikal wie möglich eine Gesinnung, einen Sui vertreten — sie ist nie ein Exklusives, das seinen Gegensatz, indem es ihn abweist, doch fordert, sondern irgendwie liegt die Ganzheit des Lebens in ihm, die alle Gegensätzlichkeiten übergrift.)」個々の芸術作品における片寄った志向は、流れる「生」の大河の一つの波である。様々な宗教の存在も、「生」の流れの中のそれぞれ違った波と考えられるかもしれない。が、この場合一つの波は他の波と決して共になることはない。それどころか他の波を完全に締め出し、否定してしまうこともある。芸術は決してそうではない。個々の作品のそれぞれのものである。独自性の中で、「意味深い現存在の全体性を、矛盾するところなく」また対立する二元性などなかったかのように表現できるのは、あらゆる精神領域の中では芸術にのみその可能性がある——ジンメルはこのように考えている。芸術は「生」の構造の最も深い具象化である」と。

さて、再び魂のことに戻ることにしよう。天国と地獄への熱狂から引き退いている魂、そして一王国を形成している魂、このような魂には全てが満ちている。恐らく、我々がそのように願わないことまでもが。「……形而上学的には、われわれのすべての経験や価値取得は、ただ魂の自己自身への途上に横たわっているにすぎないのであって、魂はもともと自分が持っていたもの以外には何物をも見

出すことができない」と確信しているとしても、しかしそのような内的發展が外的なものの上を通過して行くことは数限りなくあり、その結果、魂は自己の目標と最高の価値点を———そういう、目標や価値点は結局魂そのものの中にある、ということを認めた上でもなお———一般的に云って直接に獲得するのではなくて、魂が自己の外部にあるものと認めているところのあるものを經由するという迂路を辿って初めて獲得するのである（……und metaphysisch, daß alle unsere Erfahrungen und Wertgewinne nur auf dem Wege der Seele zu sich selbst liegen, daß sie nichts finden kann als was von vornherein ihr Eigentum war; so führt doch diese innere Entwicklung unzählige Male über Äußeres, und sie kann nun ihr Ziel und ihren gesteigerten Wertpunkt———zugegeben selbst, daß diese ausschließlich in ihr selbst liegen———, überhaupt nicht direkt, sondern nur auf dem Umwege über etwas gewinnen, was sie als ein ihr Äußeres anerkennt.)<sup>(49)</sup>」絶えず自己の限界を乗り越えて進んでいくことが「生」の本質であった。この「生」の目指すものも自己自身である。魂は、自己の内部で様々な客観的な目標になる存在をつくり出しながらそれらを獲得する。これは、「魂の内的な生の在り方」である。

人が自分の外部に切実に求めた神も、結局は自分の魂の中にある、ということが本当だったら、それはひどく虚しいことかもしれない。しかし、この大宇宙を何処まで行ってみても、恐らく神には出会えないだろうという単純な理由からも、このジンメル言葉の言葉を認めざるをえない気がしてくる。プラトンのイデアの世界も、中世の神への絶対的な信仰も、ロマン主義者たちのはるかな国も、あら

ゆる全ては魂の中にある。人々が求める魂のふるさととは魂自身なのだ。レンブラントも彼によって描かれた人物も、決して魂のことをこのように考えていなかったであろう。凡そ人間の日常の生活も、またそこで考えることの大半も形而上学的なものでないことはもちろんである。しかし彼らの魂自身は、このことを知っていたのではないだろうか。だからジンメルはレンブラントの作品からこのことを認識し、それを言葉に表わすことができたのではないか。私自身としては、魂についてのこのような考え方に對しても、先に引用したジンメル自身の言葉を借りて言うなら、「それぞれの立場の相違を明らかにするのは必要なことであろうが、しかしそのどれか一つの立場のみ承認するという必要はない」と思っている。なぜなら人は真理をいくらでも追い求めることはできるけれども、それを完全に知りつくし自分のものにすることはできないであろうから。それにしてもこのように思っていることは、真理を完全に知りつくし、そのみか真理の源であるような客観的に絶対的な神の存在を認めていることにもなるのであろうか。

### おわりに

流れていく「生」をつかまえていることは、ひどく困難なことだった———今、私はそう思う。「生」を捕えようとすればするほど、それについて書こうとすればするほど、それは私からすり抜けていってしまうのだった。平凡な人間にとっては、ただ「生」の足跡を辿ることで精一杯なのである。しかし、そういう状態であっても、私はジンメルの思索に魅かれていった。それは、現代の混乱した世界に生きる者にある統一の境地を示してくれる「生」というものに

魅かれた、といつてもまちがいではない。

それにしても、書き足りないことが山ほどある。

その中の一つは、レンブラントの「光」の問題である。これにいてもジンメルはかなり深く述べているが、ここでは極、簡単に触れるだけにしよう。レンブラントの光もまた宗教的なものである。

この宗教的という意味に多少の相違があつても、レンブラントの光を宗教的なものとして考へているのはジンメルだけではない。エーミール・ルトヴィヒは、その著者『レンブラント』の中で次のように書いている。「……実際、いつもそうだったが、彼は自分の空想の人物に神のような半面だけを与えるようなことはしなかつた。彼は彼らをも自分の二重の世界に押込めた。そして衣服の一つの線とか、一つの補布だけを天上の光で照らし、彼らの身体の大部分はそれと反対に、暗闇のなかに逐われたままにしておいた。」<sup>(42)</sup>

まわる風車の羽根の間から、陽光が射しては翳り、射しては翳る——、南国のように燦々とふりそそぐことのない、北方の太陽の光は、レンブラントの光と直接関係があるかどうかかわからないけれども、彼の決して画面全体を照らさない光、そして画面の大部分をつつむ闇、これらは、ルトヴィヒの言う「北方的な重苦しさをもつ彼の性質」をあらわしているのだらう。この性質は、ジンメルの哲学にも当てはまるのかもしれない。我々は、その北方的な深さ、重苦しさを理解することはできても、決して我々自身のものとすることはできない。

レンブラントの時代も、人々の中で優位にあつたのはやはり理性である。そして客観的な神も人々の中に存在していたにちがいない。しかし近代になつてジンメルにより、レンブラントが「生」の

哲学と結びついたことは、時代を越えた、人間というものの本来の根源的な姿について考えさせてくれる。それは、どのように理想的な世界の中で理想的な目標をもつて人々が生きようとしても、必ずその同じ人々の中に影の部分がある、ということである。それでも、我々はその影に絶望して生きるには及ばない。ここで芸術は、何らかの方法で確かに、我々を絶望とは逆のよい方向へ向かわせることができるであらう。ジンメルは言う、「芸術は世界と生とにたいするわれわれの感謝である。」<sup>(44)</sup>

△註▽

- 1 『ローマ人への手紙』第七章一五節（口語訳）
  - 2 高坂正顕『西洋哲学史』創文社、昭和四八年 五九五ページ
  - 3・4 ジンメル『レンブラント』（高橋義孝訳）岩波書店、昭和四九年 序 ii ページ
- 尚、以下において括弧内にページ数のあるものは、次の原書のものであす。G. Simmel, Rembrandt, Ein Kunstphilosophischer Versuch, Leipzig, 1919.

- 5・6 前掲書 iii ページ
  - 7 前掲書 iv ページ
  - 8 前掲書 二三六ページ (S. 204)
  - 9 『ジンメル著作集一一 断想』（土肥美夫・堀田輝明訳）白水社 一九七六年に収められたカント・ロヴィチの序文より 一一ページ
  - 10 高坂正顕 前掲書 六〇一ページ
  - 11 前掲書 六〇三ページ
  - 12 前掲書 五九六ページ
  - 13 太田和彦・紫藤貞昭『新・西洋哲学の歴史』太陽プロジェクト 一九八二年 一九八ページ
  - 14・15 ジンメル、前掲書 三三三ページ (S. 3)
- 16 『ジンメル著作集一〇 芸術の哲学』（川村二郎訳）白水社 一九七五

- 年 所収の『アンリ・ベルクソン』より
- 17・18・19・20 シンメル、前掲書一六一ページ (S. 141)
- 21 チャールズ・ファウクス『レンブラントの生涯』(藤井久栄訳) 美術  
公論社 昭和五年 一五ページ
- 22 シンメル、前掲書 一六六ページ (S. 146) 傍点は論者。
- 23 前掲書 三ページ
- 24 前掲書 一七〇ページ (S. 149)
- 25 前掲書 一八二ページ (S. 160)
- 26 前掲書 一八二ページ (S. 161)
- 27・28・29 前掲書 一八三ページ (S. 161)
- 30 前掲書 一八五ページ
- 31 前掲書 一九〇ページ
- 32 前掲書 一九一ページ (S. 168)
- 33 前掲書 一九一～二ページ (S. 168～9)
- 34 前掲書 二二二ページ (S. 193)
- 35 『ローマ人への手紙』第三章二八節 (口語訳)
- 36 シンメル、前掲書 二三五ページ (S. 202)
- 37 前掲書 二三七ページ (S. 205)
- 38 前掲書 二三五ページ (S. 203)
- 39 前掲書 二三六ページ
- 40 前掲書 二二二～三ページ (S. 193) 傍点は論者。
- 41 前掲書 二二三ページ
- 42 エーミール・ルートヴィヒ『レンブラント』(土井義信訳) 甲鳥書  
林 昭和一六年 一五七ページ 傍点は論者。
- 43 前掲書 一二二ページ
- 44 『シンメル著作集二 橋と扉』(酒田健一他訳) 白水社 一九七六  
年 所収の『箴言から』より 二〇八ページ